

# 「モンゴル人の心は北京と毛沢東に向いてきた」のか？

中国北部とモンゴル国との人的移動の現代史から



モンゴル国の草原に残るソ連軍の基地跡。レーニンの塑像が歴史の移り変わりを見ている。

楊海英 文・写真  
ヤンハイイン

静岡大学人文学部教授  
専門は文化人類学、モンゴル文化史研究  
編著に『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料(1)』（内モンゴル自治区の文化大革命1 風響社 2009年）など

久しぶりに中国でカルチャーショックをうけたのは、2008年9月2日に雲南大学で開催されたシンポジウムの席上だった。共産党書記の挨拶も5分たらずで終わり、開会が宣言されて10分後には研究発表に入っていた。まるで日本や欧米諸国にいるような進め方だったので、仰天した。

私が今までに内モンゴル自治区で経験した国際学会議は国歌斉唱と国旗掲揚から始まり、党書記が諸国の研究者らに対して愛国や、民族団結（図1）を中心とする内容で長時間演説してからようやく研究発表が開始されるという具合であり、また何かと制約が多かった。モンゴル人たちは厳しい環境の中で研究活動を続けてきたので、自由な中国南部の雰囲気を感じた私は、あたかも台湾か、自衛隊を始める前の香港にいるような錯覚さえ覚えた。

## 「日本刀をぶらさげた」モンゴル人

内モンゴル自治区とその北隣のモンゴル国。同じ民族が分断されて異なる国家に住むようになってから、64年の歳月が過ぎようとしている。ひとつの歴史と価値観をいだき同じ言語を話す人びとは、1911年に清朝が崩壊した時に一度まとまった国を創ろうと闘った。モンゴル高原の諸集団は独立できたが、漢人農民の進出が激しく漢人軍閥に要衝を抑えられていた内モンゴルは、中華民国に留まらざるをえなかった。中華民国に残ったモンゴル人たちの一部は、徳王ことテムチュクドンロブを中心に日本軍の力を借りながら、シリント



図1 モンゴル族と漢族との団結を呼びかけたポスター。「内モンゴル自治区九年一貫制学校試用課本一数学」（1969年）より。



(52) 解放军和民兵赶来了，胡麻拜被捕了。原来这家伙是个长期潜伏的苏修特务，清队运动一来，他象堵在洞里的恶狼，拚命地往外钻，妄图逃命。为了顺利偷越边防线，他掐断了电线，想切断公社和边防哨卡的联系。

図2 「修正主義国家ソ連」へ逃亡しようとした悪者を捕まえた、というストーリーの絵本の1ページ。中国の子供たちはこのような教育を受けて育つ。「草原紅唱」(上海人民出版社、1976年)より。このような物語を読んだ少数民族側は、自分たちは信頼されていない、とあらためて感じるのだ。

ル草原で独立を射程に入れた「高度の自治」運動をくりひろげた。内モンゴル東部は日本の傀儡国家、満洲国に編入された。徳王の部下たちも満洲国のモンゴル人役人たちも、実は「内モンゴル人民革命党員」がほとんどだった。同党は1925年10月にコミンテルンとモンゴル人民共和国の援助によって結成された。内モンゴル人民革命党員たちはコミンテルンの指示で潜伏し、民族自決の時を待った。

日本の敗退とともにない、シリングル草原には内モンゴル臨時共和国政府、東部には東モンゴル人民自治政府が相次いで現れた。どちらも復活した内モンゴル人民革命党員たちを中心とした組織で、モンゴル人たちの支持と信頼を得てモンゴル人民共和国との統一を切望していた。ソ蒙連合軍が南下してきた時、モンゴル人民共和国の軍人たちと内モンゴルのモンゴル人たちは東の間、「兄と弟が再会した」ように喜びを分かちあっていた。

しかし、大国同士で交わした「ヤルタ協定」はむざんにも「兄弟」を引き裂いた。「内モンゴルは現状維持」との一言で、モンゴル人たちの一部は「中国人民」とならなければならないのであった。中国は「対日協力の過去」をもつモンゴル人たちを「日本刀をぶらさげた連中クワントック」と呼ぶ。「日本刀」は日本型植民地経営と日本型近代化の代名詞だ。

司馬遼太郎の「草原の記」にはツェベクマという女性が登場し日本人に深く愛されている。彼女はシベリアに生まれ、ソ連の出現で内モンゴルに移り、満洲国で日本語を学び、敗戦を体験する。中国が内モンゴルを併合した後、粛清を予感した彼女はウランバートルに脱出した。中国に残り大学講師だった彼

女の夫ブレンサインは、1942年から2年間東京高等師範学校に留学した経歴などが問題視された。「民族分裂主義者」や「日本のスパイ」などのレッテルをはられて逮捕された彼は、10年もの獄中生活を中国で送った。牢獄を出たブレンサインは1985年にウランバートルで妻子との再会が実現し、翌年にかの地で永眠した。彼は最後までモンゴル人民共和国を祖国と見なしていた。

ツェベクマが中国を去り、夫が故郷を見守っていた時代、内モンゴルでは「民族分裂主義者

集団の内モンゴル人民革命党員をあぶり出して粛清する運動」(1967～70年)が展開された。公式見解によると、およそ34万6000人が逮捕され、2万7900人が殺害された。拷問にかけられた者は12万人にのぼる。当時、150万人未満だったモンゴル族には、ほとんどすべての家庭から最低1人の「民族分裂主義者」が輩出していたことになる。この歴史をモンゴル人たちはジェノサイドだと理解している(楊2008:2009)。しかし、これだけの虐殺と迫害があつたにもかかわらず、中国政府は一貫して「モンゴル人たちはいくら傷つけられても、モンゴル人民共和国へ逃げることはなかった。モンゴル人の心は毛主席と北京に向いている」と宣伝している(楊2009)。

一方、フルンバイル盟公安処辺防志略(1991年)という政府側の資料には文化大革命中に「修正主義国家」へ逃亡した(図2)モンゴル人の数が詳しく示されている。フルンバイル盟だけでも数百人規模で逃げている。漢族や解放軍がモンゴル人を殺してから馬に乗せ、モンゴル人民共和国方面へ追い払って「逃亡」を演出させる事件も起こっていた。事実、大勢がツェベクマのように同胞の国へ越境していたにもかかわらず、政府は「モンゴル人の心は毛主席と北京に向いている」と強調する。

### ゴビ草原の越境者

1997年7月27日、私はモンゴル国南西部のドントゴビ県をジープで疾駆していた。瞬間豪雨に襲われたので、県庁から北へ12キロメートル離れたサインチャガン郡の遊牧民のゲル天幕に入った。私が内モンゴルから来たと告げると、家の主人サイシंगा(1997年当



内モンゴル臨時共和国政府の廃墟。

時75歳)は「わしもじゃ。今日はよい日だ。めぐみの雨が同郷の人を連れてきた」と喜んだ。夜、老人は豪華な料理を用意し、タンスの中からわざわざお箸を出してくれた。モンゴル国の人びとはソ連の影響を受けてスプーンとフォークを常用するが、お箸は内モンゴル人の私に対する気配りを意味していた。老人は自らの生い立ちについて静かに語った。

サイシंगा老は内モンゴルのシリングル盟鎮黄旗の出身だ。父親は徳王配下のモンゴル軍の軍人で、日本軍による訓練を経験した「日本刀をぶらさげたモンゴル人」だった。サイシंगाは少年時代を日本支配下のフフホト市で過ごしエリート校に通った。父親のいたモンゴル軍は日本軍と肩を並べて黄河沿線に展開する中華民国の傅作儀部隊と戦った。傅作儀はモンゴル族全体を「対日協力者」と見なして捕まえては殺す大漢族主義者だった。

日本軍が敗退した後、徳王のモンゴル軍の主力はソ蒙連合軍の指令でウランバートルへ動かされ、再教育を受けた。1946年に内モンゴルに戻ってきた徳王の元軍隊に、青年サイシंगाも加わった。2歳になる息子を残しての決意だった。徳王の精鋭は共産党が指揮する騎馬部隊に変身し、漢人同士が戦う中国の内戦に動員された。

1949年秋、サイシंगाの部隊は傅作儀の残軍を一掃しようとして内モンゴル最西端のアラシャン沙漠に入った。奇しくも徳王も、部下たちを率いて1949年4月にアラシャンに到着し、西モンゴル自治運動を進めていた。徳



内モンゴルから国境を越えてモンゴル人民共和国へ逃亡したサイシंगा老。



13 大家散开队形，包抄过来。“一团火”闪电一般跑到那家伙跟前，钟站长弯下半个身子，象老鹰抓小鸡似的把那家伙揪上马背。——放信号弹的越境分子就擒了。

図3 「修正主義国家」のモンゴル人民共和国から潜入したスパイを中国軍が逮捕したシーンを描いた子供の絵本。「草原前哨」（人民美術出版社、1977年）より。

王の部下たちも、まだ共産党に帰順していなかった軍を連れてアラシャンに集まった。共産党は「内モンゴルの高度の自治」を求めるモンゴル人の主張を受け入れなかったため、徳王も1949年12月末にアラシャンからモンゴル人民共和国に亡命した。

共産党指揮下にあったサイシंगाの部隊もアラシャンで解散を命じられた。サイシंगाは妻子が待つ故郷のシリソグに帰る勇気がなかった。「日本刀をぶら下げたモンゴル人」たちに対する共産党の政治的な清算が始まっていたからだ。故郷よりも知り合いのいないアラシャンに落ちつけば、過去が暴かれずにすむと思った。除隊したサイシंगाは、アラシャン右旗タムソク・ブラク郡の遊牧民になった。この郡のモンゴル人の多くは、1939年にモンゴル人民共和国がソ連の意向で宗教弾圧を強行していた頃に、中華民国側の領土に移動してきた人びとである。

## 決行された逃亡

しかし、アラシャンも安住の地ではなかった。中国は1950年代から2～3年ごとに身分調査をおこなっていた。全国規模で個人の履歴を徹底的に調べて「危険人物」を割り出す。サイシंगाは父が「対日協力者」で、自身が徳王の元部隊にいたことで取り調べを受けた。

文化大革命が勃発し、「民族分裂主義者集団の内モンゴル人民革命党員をあぶり出して肅清する運動」がスタートすると、アラシャン沙漠でも虐殺が発動された。モンゴル人幹部たちは次々と肅清されていった。遊牧民として家畜の世話をしていたサイシंगाも人民公社の本部に拘束され「批判闘争大会」で吊

るし上げられるようになった。

サイシंगाはついに中国から脱出する決意をした。1939年にモンゴル人民共和国から逃げてきたモンゴル人たちは、「修正主義国家のスパイ」（図3）だと疑われ、北へ逃亡する人が続出していた。政府の監視と警戒も強まっていた。1969年早春、春節を迎えようとしていた時に、「批判闘争大会」も数日間やすむことになった。サイシंगाはラクダを2頭用意した。深夜、彼は人民公社の幹部らが宴会に興じていた隙にラクダに跨って北へ

疾走しだした。饅頭2個と磚茶の塊を非常食として携行した。昼は沙丘のくぼみに身を隠し、夜中に北斗星をめざす。饅頭が切れた時はヒツジの死骸から肉をもぎとってかじり、磚茶の葉を噛んで渴きをしのいだ。3日後にはモンゴル人民共和国領内に入り亡命に成功した。

「あの時、極寒の中で逃げていた自分を支えていたのは、20年前に同じ道を辿って亡命した徳王だった。徳王はモンゴル人民共和国に1年間弱滞在した後、ソ連の命令で中国へ強制送還され、文化大革命が始まった直後にフフホト市で亡くなった。そのニュースを聞いて、もう中国で生きていく元気を完全に失った」と、サイシंगाは振りかえる。

## 振り子は動く

サイシंगाはモンゴル人民共和国で76日間にわたる取り調べを受けた後、ドムドゴビ県に定住した。まわりは1939年に宗教弾圧を嫌っていったんは内モンゴルへ避難し、中国にも社会主義制度が導入されるとふたたびモンゴル高原に戻った人びとが多かった。国家主導の政治に人びとは振り子のように動いていた。

彼は1972年に亡命先で2度目の結婚をし1女を設けた。1990年にはモンゴル国への帰化も認められた。1年後の夏にウランバートルの街を歩いていると懐かしい故郷の方言が聞こえてきた。内モンゴルとの行き来が再開された後にやってきた旅行者だった。サイシंगाは町でばったり会った人物に息子の生存を確かめるよう依頼した。

「息子さんは生きています」との便りが半年後に届き、サイシंगाは1995年3月に49年ぶりに故郷シリソグの土を踏んだ。2カ月間息

子の家で過ごしてからモンゴル国へ戻ろうと、国境の町エレンホト市で出入国の手続きをしていたところ、偶然にもアラシャンの旧知にも再会した。「お前が逃げた後、人民公社の責任者たちは全員3カ月間拘置された」と言われた。

「モンゴル人たちは歴史が始まって以来ずっと自由に行き来してきた。遊牧民は心の自由を尊ぶ民族だ。漢人が草原に入り、ロシア人がシベリアに現れるようになってから、我々の運命も他人に牛耳られるようになり、心も特定の方向に向けて釘で打たれてしまった。心の自由な移動が制限されると、また戦になるよ」とサイシंगाは語る。

## 他人の拳と同胞への気配り

中国は現在、積極的にモンゴル国での投資を拡大している。内モンゴルとモンゴル国との貿易は盛んで、人的移動もある程度認められている。中国はモンゴル国との交流を対内モンゴル政策の一環として、主導権を握って進めようとしているのに対し、モンゴル国も中ロ2大国に挟まれた小国として戦略をねっている。

1993年9月に「世界モンゴル民族フォーラム」が当時の首相ビヤムバステンの後援によりウランバートルにて開催されたが、中国はこれを「汎モンゴリズムの復活を促すものだ」として批判を強めていた。2002年、モンゴル国の対外輸出額の42.1%が対中国だったという数値は、経済上の依存性を物語っている。中国が立ち上げた「上海協力機構」はテュルク系のカザフスタンなどの拳を借りて、新疆ウイグル自治区のウイグル人の分離独立運動を叩こうとしたものである。モンゴル国は内モンゴルに住む同胞たちの存在を意識して、「上海協力機構」にはオブザーバーとして加わりながら距離をおいている。モンゴル国とのあいだの「振り子」たちの動向からますます目が離せなくなっている。

## 参考文献

楊海英 2008 「ジェノサイドへの序曲：内モンゴルと中国文化大革命」『文化人類学研究』73(3): 419-453。

—— 2009 「モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (1)」内モンゴル自治区の文化大革命1風響社。